



児童生徒の実態に応じた段階的な指導・援助

■ 目標のスマール・ステップ化

- 不登校の児童生徒への対応については、当面の目標達成に向けて、今できるところから段階的に目標を設定し、一つずつ進めていくことが重要である。**目標のスマール・ステップ**のメリットは、対象の児童生徒に必要以上の負担をかけず、一人一人に応じた働きかけが可能であること、必ず乗り越えられるステップを設定することで、一つずつ目標をクリアするたびに、児童生徒が成功体験を重ねていくことができるなどである。目標は、対象の児童生徒の情報を交換しながらチームで検討する。

■ 段階的な指導・援助

- 学校に足が向きつつある不登校児童生徒への対応として、保健室登校→カウンセリング室登校→学年資料室登校→教室など、段階を追って教室登校ができるようにする取組や、放課後登校、部活動登校、昇降口登校など、児童生徒の実態に応じた登校スタイルでの取組などの**段階的な指導・援助**が必要になる。
- 児童生徒にとって、家庭から学校、昇降口から保健室、保健室から教室へと、この一つ一つのステップを踏み出すには大変な勇気とエネルギーが必要である。不登校の児童生徒がやっとの思いで登校してきたにもかかわらず、他の生徒からからかい等を受けたり、教職員の過剰な気遣いや励ましのために、かえって圧迫感を覚えたりして状況が悪化してしまう場合がある。学校としては、①温かい雰囲気の下に自然な形で迎え入れられるよう努める。②あせらずに徐々に学校生活への適応力を高めていくよう工夫する。③コーディネーター役の教職員を中心に、校内で絶えず連携を図る。④友人の手助けを借りるなどの対応が必要になってくる。

■ 別室登校による対応

- 不登校児童生徒の別室登校については、各学校において工夫した取組が行われている。個別の時間割を作成し、教職員が積極的に学習支援をしている事例が多い。部屋のレイアウトを工夫し、個別の学習ブースを設置している学校もある。

- ◆ G中学校では、別室登校用の**出席掲示板**を職員室に設置し、出欠の状況が一目で分かるようにするとともに、生徒に自己決定させるために**学習計画表**を作成させるなどして、別室登校での学習支援を計画的・継続的に行っている。
- ◆ H中学校では、保健室登校の生徒に対し、養護教諭以外に、毎時間1名の教職員が指導に当たっている。生徒の要請があれば、別室で授業も行っている。さらに、事務職員が声をかけたり、用務員と一緒に作業を行ったりして全教職員で関わっている。

■ 学年副担任の役割

- 別室登校をする児童生徒への指導については、別室が児童生徒にとっての「安住の地」となってしまう、別な問題を引き起こすケースも見られる。

- ◆ I中学校では、別室登校の場として「学習室」を設置し、援助を続けていたが、学習室が自由に入出りのできる居心地のいい場所ととらえる生徒が多くなり、学習室での狭い人間関係に起因するストレスやトラブルが見られるようになった。そこで「学習室」を廃止し、当該生徒との関わりをもつのは学級担任を最優先とするが、各学年の**副担任が生徒の登下校の状況、居場所等を常に把握し、援助に当たるシステム**をつくり取り組んでいる。副担任が生徒の指導に当たり、生徒の様子については記録簿に記入してコーディネーター役の教員に提出し、担任への情報提供につながるようにしている。